

平成24年2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

## 光明寺の雷除けの御札

雷はそのしくみが科学的に解明された現代でも怖いものです。青梅市内では東青梅六丁目・光明寺と梅郷四丁目・菅原神社の2か所で、「雷除けの御札」が配られています。

古来、天からの恩恵や被害は「天つ神」の語で表されるように、天の神への信仰を生じさせました。なかでも雷は、恐ろしいものとして畏怖されるとともに、天の神に由来する火を雷光により地上に運ぶものとして崇拜されたため、天と地を媒介する雷神として神格化されてきました。雷神は別雷神・雷電様などと呼ばれ、雷鳴は鳴神、雷光は稲妻と呼ばれるようになりました。特に、民間の雷神信仰は農耕生活と深い関係を持ち、落雷した田は豊作になるというなど、広く農村社会に浸透していきました。やがて、雷神は鬼のような姿で、虎の皮の禪ふんどしをまとい、太鼓を輪形に連ねて負おい、手に撥ぼちを持つ姿として表されるようになりました。

平安時代になると、流行の御霊信仰ごりょうと結合します。御霊信仰とは、疫病や災害が発生すると、それを政治的事件などで失脚して非業の死を遂げた特定の人物の御霊の報復と捉え、その人物を神として祀ることで祟りを免れようとする信仰です。なかでも藤原氏により大宰府に左遷された菅原道真に対する信仰は、最たるものでした。道真の死後、京都で続いた雷火による災害と、藤原一族の雷死などの異変を、道真の怨霊による祟りと捉え、朝廷は道真の霊を鎮めるために、火雷天神の号を贈りました。後に、北野天満宮が建立されると、以後、京都北野天満宮・九州大宰府天満宮を拠点として、天神信仰は急速に広まって行きました。その過程で、道真が学者・文人として優れていたため、天神の神格は、古来の雷神信仰に文学・学問の神としての性格が付与されて、普及しました。

現在、天神といえば学問の神・道真とされ、後に付与された神格の方が意識されて、信仰されています。

ここで紹介するのは、古来の天神・雷神信仰が、現在まで引き継がれているものです。

### 1. 東青梅六丁目・光明寺の「雷除けの御札」

現在、7月の御施餓鬼おせがきの折に希望者に配られています。

御札には、梵字と、四電王の名前が漢字五文字で刷られています。四電王は見たこともない漢字表記です。御住職によると、電王の名は口伝でのみ伝承されてきたといい、

「アギタデンノウ・セツチュルデンノウ・スタカあるいはシュタカデンノウ・シュタマニデンノウ」です。

御札は、寺の背後にある城山に祀られている雷電社に因むものです。雷電社は、市の天然記念物に指定されているシイの木が生える、師岡神社の東側に在る小祠です。江戸時代後期編纂『新編武蔵風土記稿』の上師岡村の条に「雷電社・・・小社 城山の上にて、村民の地所にあり 本村光明寺の持なり」とあるので、江戸時代の19世紀には、雷電社が城山にあったことが分かります。

この御本尊は雷神で、現在は山から下ろされ光明寺で祀られています。厨子に入れられた高さ20cmほどの雷神は、赤く彩色され、雷太鼓を背にし、両手に撥ぼちを持ち、頭に2本の金色の角を生やし、雲の上に踏ん張って立っています。下半身を覆う布の前部には虎皮が顔付きで描かれ、裸身部には黒毛が、お腹には立派な臍へそが描かれています。製作は江戸時代の19世紀とされます。

光明寺の雷除けの御札は、古来の雷神信仰を今に伝えるものですが、現在、御札の希望者は減少し、版木から刷る御札は50枚ほどということです。版木には製作時期を示すものは無く、いつ頃からこの御札が配られているかなどについては、分かっていません。光明寺の周辺地区では、御札が玄関そばや配電盤近くに貼られているのをみかけます。

## 2. 梅郷四丁目・菅原神社の「雷除之御守」の御札

現在、4月第2日曜日に、菅原神社と同じ境内にある琴平神社・八坂神社とともに「三社祭」として行われる例祭で、「雷除けの御札」が配られています。250～300枚ほどの御札が、用意されるといいます。御札は、「菅原神社 雷除之御守」と書かれた横5cm、縦8cmほどの大きさの和紙に包まれています。

菅原神社は、『新編武蔵風土記稿』に、「天神社、天澤院持てんたくいん」とあります。神社の創建は不明ですが、祭神は菅原道真です。明治13(1880)年調査の『皇国地誌』には、「御神体・道真像が元禄4(1691)年に奉納された箱内に鎮座し、大きさ5寸(約15cm)、束帯姿の木製坐像」と記録されています。

「雷除け」の御札がいつ頃から配布されてきたかは不明ですが、道真を雷神・天神とする旧来の信仰を伝えています。(文責 三好 ゆき江)